
石井米雄先生のご遺志を受け継いで

平野 健一郎

国立公文書館 アジア歴史資料センター

石井米雄先生のあと、本年4月1日から私・平野健一郎がアジア歴史資料センター長を務めることになりました。この引き継ぎは、いわば石井先生のご遺囑によるものです。先生は3月31日までの任期を満了されるおつもりで、その半月前のセンターのスタッフ・ミーティングに私を後任予定者として呼び、スタッフに紹介するとともに、仕事の引き継ぎをするという段取りをつけてくださっていました。そのことを先生ご自身が私に直接伝えてくださったのが1月26日だったのですが、その2週間後、突然の訃報が私にももたらされました。信じられない知らせで、茫然としました。

先生のお話を伺える最後の機会になってしまったあの日、私には、先生にもう一度お会いするまで、まだ決断を留保してられるという気楽な思いがあったかもしれません。アジ歴の創設からお亡くなりになる日まで、アジ歴にとって石井先生はまさに余人をもって代え難い存在でした。そのような方の代役を、というお話が私に来ること自体が半信半疑のことでした。お約束の引き継ぎの日、引き継ぎ事項をお話になっているうちに、「ウン、これはやはり私じゃなければ無理だ、もっと続けよう」とおっしゃるのではないか、という思いが半分以上ありました。あるいは、「すべてきめたから、あとは安

心してやりなさい」と言われる可能性も十分にあると思いました。その場合は、お引き受けしたとしても、いつでも先生に甘えられるはずでした。そのどちらであったか、確かめることは永遠にできなくなりました。そして、私は先生のご遺志に背くことができなくなりました。

先輩研究者としての石井先生

石井先生に最後にお目にかかって、30分ほど2人でお話することができたのは、奇しくも先生が暫くお勤めになった上智大学の向いにある、四谷駅近くの集会場でした。先生は用件を済ませるのを待ちかねたように、ご自分の研究の話に移られました。すでに3冊のタイ研究書の執筆計画を立て、その一部は執筆を開始していること、その1冊はモンクット王による痛快なキリスト教批判の論理と物語で、それによってタイ仏教の特徴がさらによく理解できるようになるであろうこと、自宅で調べものに熱中できるのがなんとも楽しいことなどを生き生きとお話しになったあと、ドン・ボスコ書店へキリスト教関係の本を求めに行くとおっしゃって、JR四谷駅の上の橋を歩いて行かれました。手首にはC型肝炎治療のための点滴カテーテルの挿入口が痛々しく、少し前かがみのゆっくりした歩調ではありましたが、知的なお元気が溢れるお姿、それが私の眼に焼き付いている石井先生のお姿です。

タイ上座部仏教の世界的研究者としての石井先生は、私などには近づきたい知的巨人でし

平野 健一郎 (ひらの けんいちろう)

独立行政法人国立公文書館アジア歴史資料センター長。

た。先生のお近づきを得たのは、ある学会でのアジア研究の方法をめぐるシンポジウムでした。すでに東南アジア研究の指導者の地位を確立されていた先生の横に、駆け出しの東アジア研究者の私が座り、国際関係論の視点から何か怖いもの知らずの意見を述べたのです。それが面白いと思われたのか、その後、アジア研究に関する会議に何度かご一緒させていただきました。そして、アジア歴史資料センター長になると、私を諮問委員会の委員に任命され、また、人間文化研究機構長として地域研究の推進に乗り出されると、私を地域研究推進センター長に推薦されました。私のどこに見どころを見つけられたのかわかりませんが、先生には後輩を包み込んで、上手におだてて役を演じさせる兄貴分というところがありました。

石井先生は、すぐれた研究者であると同時に、すぐれた研究・教育行政官として、多くの研究者から頼られました。世俗的にも優れた才幹を發揮される類まれな資質は、外交官から研究者に転身したことで培われたという見方があります。確かに、京都大学東南アジア研究センターの創設に関わって、先生はその特質を遺憾なく發揮されたようです。しかし、私が地域研究の先達としての石井先生のオーラル・ヒストリーを伺ったところでは、順番は逆でした。タイ語に魅了されて、それを勉強するために外交官になったのですし、東南アジアを研究したいがために、当時の強い反対に抗して、東南アジア研究センターの設立にあらゆる力を注がれたのでした。ご自分の知的興味を何よりも優先されて突き進まれる、実は、それが先生を実行力優れた研究・教育行政官にしたのではないかと私は思います。周囲に細かい気遣いをなさるのも石井先生らしさでしたが、自説を通されることが少なくなかったのは、ご自分の信念と関心で他をリードしていく指導者だったからでしょう。

初代アジ歴センター長としての大きな功績

アジ歴は初代のセンター長としてまことに得難い人を得ました。石井先生があれほどまでに打ち込まれなかったら、今日のアジ歴はなかったのではないかと多くの人が思っているに違いありません。近現代の日本とアジア諸国との関係にかかわる公文書のすべてを原資料のまま、「いつでも、どこでも、だれもが、自由に」無料で読むことができる形で提供するデジタル・アーカイブズという構想は手探りの末に生まれたと聞いていますが、それをこの世に実現させたのは先生のリーダーシップです。先生の知的好奇心と実行力がそれまでの世界のどこにもなかったタイプのデータベースを生み出したといって過言ではありません。ユーザーは、アジ歴のホームページにアクセスされると、そのトップページから目当ての歴史文書に行きつくまでにさまざまな工夫がなされていることに気づかれると思います。これらはすべて、先行のモデルがない中、アジ歴のスタッフが石井センター長の楽天的な激励に応えて創り出したものです。

たとえば日中戦争中の日中関係に関する国際学術会議を開くと、最初は、日中双方の研究者が、互いに罵りあうということはもはやないとしても、落ち着いて共に議論するというにはなりません。しかし、2回、3回と回を重ね、お互いに資料を見せ合って議論を重ねて行くと、同じ資料を使っても同じ解釈にはならないことを新鮮に感じたりするようになり、議論がかみ合うようになります。これは私自身が経験したことです。石井先生は繰り返し「歴史認識を共有することなど不可能。だが、歴史事実を共有することはできる」とおっしゃいました。これこそまさにアジ歴というアーカイブズの存在理由をもっとも的確に表現した名言だと思います。歴史事実を共有することによって歴史対話も可能になりえます。アジ歴が歴史記録を保管するアーカイブズにとどまらず、歴史事実の共有を可能にするアーカイブズとして存在すること自

体が国際関係に有意義に作用するのです。

これからのアジ歴

発足して8年、今やアジ歴は世界をリードするアーカイブズになりました。アジ歴のような歴史資料のデジタル・アーカイブズは世界のほかにまだなく、他の国々がアジ歴をモデルにしてそれぞれのデジタル・アーカイブズを創るべきだと考えられます。中国、韓国の人々は当初、アジ歴の真正さを疑っていましたが、今では、それらの国の歴史家たちが「アジ歴はいい」といって、高く評価するようになりました。ヨーロッパの学界でも注目されるようになっていきます。すでに石井センター長時代に、アジ歴の存在が国際社会に広く認識されるようになりましたが、今後もアジ歴の国際的な存在価値と機能を高めて行く努力を続けたいと思います。アジ歴のホームページ・アドレスをクリックするだけで、現在2,000万画像を越える歴史資料をパソコンの画面で見ることができ、画像数はこれからも増えて行きます。国立公文書館、外務省外交史料館、防衛省防衛研究所図書館が原資料の画像を提供して下さるお蔭ですが、アジ歴としては、受け入れた資料の信頼性を強め、利用の便宜を増やすことが基本的任務です。これからも研究員、調査員の地道な努力にさまざまな工夫を加えて、国内、国外からのアクセスを増やして行きたいと思います。

アジ歴は国立公文書館、外交史料館、防衛研究所図書館からの提供資料を検索可能にして公開していますから、アジ歴の画面上なら3館の所蔵資料を容易に横断検索することができます。これは日本の歴史理解を大きく前進させるアジ歴効果です。このアジ歴効果は、IT技術の特性からして、当然他の資料群との間にももたらされうるものです。クロス・レファレンス機能の充実はこれからのアジ歴の課題の一つであると考えます。石井センター長は、たとえば戦時中の日本の在外公的機関の資料、外国の機関に残されている日本の公文書などをアジ歴のデータベースに加えることを考えておられました。「アジア歴史資料」データベースの完備に向けて、アジ歴をさらに充実させて行くことが石井先生のご遺囑に応える道にほかならないと考えております。

中国、韓国、米国などにもアジ歴と同じ歴史資料のデジタル・アーカイブズが出来れば、国際的な横断検索が行えるようになり、それが歴史理解の深化をもたらし、国際相互理解は大きく前進するに違いありません。石井先生が創り上げてこられたアジ歴は未来の国際デジタル・アーカイブズ・ネットワークの先頭を進んでいるのであり、日本が世界をリードする知的国際貢献の一つになっていると自負してよいと思います。



平野健一郎国立公文書館
アジア歴史資料センター長

略歴

ハーバード大学大学院学術博士（歴史・東アジア文明）、東京大学名誉教授、早稲田大学名誉教授。東京大学総合文化研究科教授、早稲田大学政治経済学術院教授、人間文化研究機構地域研究推進センター長を経て、平成22年4月より現職。平成13年度より平成22年度まで国立公文書館アジア歴史資料センター諮問委員、平成17年度に国立公文書館アジア歴史資料センター海外利用促進委員長を兼務。

主な著書

『国際関係論』（東京大学出版会、共著、1982年）、『国際文化交流の政治経済学』（編著、1999年、勁草書房）、『国際文化論』（東京大学出版会、2000年）、『東アジア共同体の構築3・国際移動と社会変容』（共編、岩波書店、2007年）等